
クリスマスローズの罠

マイマイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスローズの罠

【Zコード】

Z0107Z

【作者名】

マイマイ

【あらすじ】

僕はクリスマス前に友人の経営する花屋に訪れる。そしてその友人が僕にしたのは。。。そしてそのあともうひとりの友人が僕に。。。

自分が書いた「桜の下には」「ひまわりのむこうがわ」に出てくる3人をつかつて書いてみました。本編とはなんの関係もありません

www

もうなんだけよんでもじゅつぶん楽しんでいただけます。

H口度が自分の作品の中で一番高いです。。。

どうして、この時期になると毎年同じクリスマスソングが流れるのだろう。

夜が暗いといつことさえ忘れさせるような電飾の数々。

輝くイルミネーションは、薄汚れた街を薄っぺらな光で覆い隠す。

このメロディを聴くたびに、僕の胸の奥は古傷をひっかきまわされたよつの痛みを感じる。

ちょうど1年前、僕はひとりの女性に出会い、

それから1年後のクリスマスイブに、僕は彼女を失った。よくある話。

彼女への想いは、恋じゃなくて、愛なんていうのも違つ。

ただ、彼女を失つた後、僕の身体が半分どこかへ行つてしまつたような空虚が残つた。

彼女のいない世界で、僕はなんのために生きているのだろう。

また考へても仕方のないことばかりがぐるぐると頭の中で渦を巻く。

「いや、田的だつたらしい。

僕は両手で顔をパンパンと叩いた後、小さな店の看板を見上げる。

『ウエムラ生花店』

「よつ、来たな」

サトシさんが何か大きな花束のようなものを作りながら、入り口の僕を見て笑う。

店の中は暖かく、こわばつていた頬やしげれるほど冷え切った手が体温を取り戻していく。

「じんばんは、サトシさん、今日は何の用ですか？」

サトシさんは僕の同居人の友人で、花屋を経営している。

背は高く、金髪に浅黒い肌。耳に光るいくつものピアス。猛獣のよ

うに鋭い皿つわ。

「どうみても花屋と書つよつはチンパリに近い。

いつも泥だらけのツナギを着て、よく僕が暮らすハウスにも遊びに来る。

サトシさんは作りかけていたものを片付け、水道で手を洗いながら言った。

「いや、ケーキもひつたんだよ、ケーキ！ オレひとりで食つたんじやつまんねーからセー！」

「ケーキ？」

「やうやう、オレの知り合ひがケーキ屋やつてな。クリスマスの試作品だとも」

「はあ……」

サトシさんは店の奥から小さな折りたたみの机を引っ張り出し、その上に白い箱を置いた。

「まだ店閉めるこままで悪いけど食おうぜ」

サトシさんは一矢一矢しながら、ナイフとフォークを持ってきた。

「それならこつもみたいにハウスを持ってきてくれたら、みんなで食べれたのに」

「うひーわざわざ野ぶたりでケーキを囲まなくなりなーんだうう。

」のうとのやねーとは、とおどせ理解できない。

「・・・オマジとふたりきりで食べたかったんだ

サトシさんの大きな手が僕の肩を抱き、鋭い目が、その瞬間せつなげに細められる。

でも僕はもうひっからない。

「うひーう[冗談、疲れませんか?]

僕が言ひとくすいへつまうなをひサトシさんはふへられて座り込んだ。

「なんだよ、可愛くねえなあ・・・慌てるのを見るのが面白いの」

僕だつてハウスで毎度毎度、同居人のレイさんにこうおちよく
られて、

サトシさんにも似たような冗談でわざわざ遊ばれてきた。もうだま
されない。

サトシさん、まあいいや、と立ち上がる。セントラルと笑う。

「なあ、ともかくその箱開けてみてくれよ。自信作らしいから」

その箱は一五センチ四方くらいの大きさで、飾りも何もなく真っ白
だ。

ゆっくりと箱を開ける。

「これが・・・ケーキ・・・?」

箱の中にあつたのは、花。

しづく小さな花弁。そのふちはほんのりと桃色をおびている。

真ん中が黄色く、全部で5枚の花弁を持つ花。

それがこくつも合わせたりバームの形をつくる。

周りにはポインセチアの深紅の葉が散らされ、

それは一つの芸術作品とこえるような、フリワーランジメントだった。

僕のびっくりした顔をみて、サトシさんは得意げに胸を張る。

「なー? すっげーだろ! あんまり食い物に見えねえのが残念だけ
どなー」

フォークを手に取ったかと思つと、サトシさんは惜しげもなく花弁
の一部をもぎ取る。

とつあえず食え、と、その崩れた花を呆然としている僕の口の中へ
入れる。

クリームがふわっと僕の口の中で消え、爽やかな甘みが残った。

「・・・おいしいです・・・」

「だろー？」いつのケーキは絶品なんだ。また今度紹介するからなー」

同じフォークで、サトシさんはバクバクとケーキを食べ始めた。

うまいうまいと言しながら、ときどき僕の口にも放り込む。

ガラス張りの店内の様子は、外を歩く人から丸見えだ。

いつたい自分たちがどう見られているかを考えただけで、僕はうんざりした。

「このケーキな、クリスマスローズとポインセチアのイメージなんだつてよ」

クリームをフォークですくい取つて舐めながら言つ。

「クリスマスローズ・・・」

名前だけは聞いたことがあるけど、こんな花だとは知らなかつた。

可憐な花。でもどうか悲しげにも見える。

あこやなケーキはあつとこつまに食べられ、サトシさんはフォークを置いた。

サトシさんはあまり無造作にケーキを放り込むものだから、

僕の口の周りはクリームでべたべたになる。

それを指をして、サトシさんが意地悪そつこ唇を歪めて笑う。

「クリーム、すげえこいつぱこいつてる」

つこつこつていうか、つけられたんだ、と思しながら、指で口元を拭おうとしたが、

その手をサトシさんに強くつかまれた。

「え？」

サトシさんの日焼けした顔が近づいてくる。店内の光をつかって、いくつものピタスが輝く。

薄い唇からのぞく、赤い舌。凶暴なまなざしに、僕は怯んだ。

「じつとじつ」

低く囁くその声に、僕はもう動くことができない。

僕の唇のまわりで溶けたクリームを、サトシさんはゆっくりと舐める。

じつじつと熱く、柔らかな感触。唇の周りから、頬、そして首筋へと。

「あよ、あよと、サトシさん・・・」

「うわせよ」

怒ったような声でサトシさんは僕の顎をつかみ、強引に顎を割つてその奥へと舌を忍ばせる。

「うふ・・・やめ・・・んつ・・・」

舌を絡め、歯の裏側へ。じこまでも僕の口のなかを犯していく。

これは、なんだう。じつじてこんな・・・いつもの[冗談の続き]?

身体の力が抜けて、僕は床に座り込む。

サトシさんは座り込んだ僕の頭を撫でる。

「オマエ、やつぱつ、可愛いな・・・」

サトシさんはまた僕にキスをした。

今度は床に押されつけられる。舞い散った色とりどりの花弁。

「いやだよ・・・サトシさん、僕は・・・」

頭が混乱して、どうしたらいいのかわからない。情けないこと、涙が出てくる。

サトシさんは僕の言葉なんて聞こえないみたいに、首筋から胸へと舌を這わせる。

シャツのボタンは外され、サトシさんの指が僕の乳首に触れる。

その刺激に僕は耐えられなくて声をあげた。

「やつ・・・・・ちょつとい、ほんとこ・・・・・あめりかて!…」

サトシさんはまた、あの凶暴な手で僕を見る。

「敏感じゃねえか・・・・その声、もっと聞かせよよ

ほり、といつて僕の乳首に歯をたてる。そしてまたそれを舌で何度も舐め続ける。

「いやだつ・・・て・・・・・つてゐる・・・・」

意地悪な指が、僕のベルトにかかる。あつ、と思ひ間もなく、僕は下着まで脱がされた。

「サ・・・・サトシさん・・・?」

「我慢するな」

サトシさんは僕の唇に深く口づけたまま、指でペースを弄りはじめた。

信じられないことに、僕のそこはサトシさんの手の中ですぐに大きくなつて、

先から流れる透明の液体がぐちゅぐちゅと卑猥な音をたてはじめた。

身体の内側からものすごい快感の波が押し寄せてくれる。

僕はたまらなくなつて、サトシさんじがみつへ。口を離して叫ぶ。

「あ・・・もうやめてくれって・・・いく・・・こいつをやめ・・・
から・・・」

ふこ」「サトシちゃんの身体が離れる。ペニスに残る、せつない疼き。

サトシさんが僕をつづぶせにして、尻を突き出せせる。なに・・・?

「モト、可愛いなあ・・・」

後ろから、僕の尻の穴になにか冷たい液体が塗り込まれる。

サトシちゃんの熱い身体が背中から僕に重なり、後ろから手を伸ばして僕のペニスを刺激する。

直後、僕の中に熱い塊がねじ込まれた。

「あつ・・・いた・・・い・・・痛いよ・・・」

僕の声になんかかまうことなく、サトシちゃんはぐいぐいと中を突き上げる。

何度も腰を打ちつけてくるサトシちゃんの動きに、今度は僕の身体が反応しあじめる。

そんなはず、ないのこ。こんなこと、いやなのこ。

「サ・・・・サトシさん・・・もひ・・・・僕・・・・」

「いいよ、いけよ

その声にまた刺激され、僕はサトシさんに突かれながら勢いよく果てた。

サトシさんはそのあとすぐに、僕の中に精液をぶちまけた。

僕はもう、何が起きたのかよくわからず、そのあとはされるがままになっていた。

サトシさんは丁寧に、僕の汚れた身体を拭き、洋服をきちんと着せてくれた。

床に座り込んだままの僕をそのままにして、サトシさんは閉店の準備をすすめる。

花を全部店の中に入れて、看板をたたみ、シャッターを下ろす。

「モト、今日オマエ、泊まつてこけよ」

サトシさんが優しく微笑んで言つ。僕は答えられない。

自分でもどうしたいのか、わからない。

また唇に激しいキス。ああ、僕はもうおかしくなりそうだ。

そのとき、店のシャッターがパンパンと叩かれた。

サトシさんは舌づかして、誰だよ、と入り口に向かう。

僕はシャツの袖で、唾液に濡れた唇を拭う。

開かれたシャッターの先には。

すらりと長い脚、陶器のように白く滑らかな肌、

同じ人間とは思えないほど整った容姿を持つ、僕の同居人、レイさんがいた。

家庭教師の帰りなのだろうか。いつも黒い光沢のあるスーツに身を包み、

上から赤いダウンジャケットを着ている。手にはふたつのヘルメット。

「モト、いるか

「レイヤーさー・・・

僕は思わずレイヤーさんに駆け寄った。

「ママンで聞いたり、サトシの店ひつじこつかひ。ほり、帰るが

無表情で僕にヘルメットを投げる。

僕はヘルメットを受け取った後、なんとなくサトシを見た。

サトシさんは腕組みをして、軽くため息をつき、

「お迎えがきちやったかー。じょうがねえな

と言つて、僕の耳元で「お楽しみはまた今度だ」と囁いた。

その様子を見て、レイさんが不思議そつた表情をする。せりやせりだろ。

僕はサトシさんに見送られながら、レイさんのNEX1200に乗せられて、

ハウスまで帰った。

顔を切り裂くような冷たい風の中、さつきのことが現実だったのかどうかわからなくなる。

なんであんなことになっちゃったんだろう・・・

ハウスには珍しく誰もいなかつた。

時間は午後10時。

本来なら、このハウスの持ち主であるママンと他の女性が3人いるはずなんだけど。

レイさんに尋ねると、

「ああ、っこわっせみんなで温泉に出かけた」

「こんな時間に？」

「夜から出発する、安いツアーがあるんだそうだ」

「ふうん。

正直そんなことさせじつでもいい。

僕はとにかく部屋に戻って、ひとりになりたかった。みんながいな
いならちょうどいい。

とにかく気持ちを落ちつけたい。

「じ、じゅあ、僕はこれで。レイさん、おやすみなさい」

僕は部屋への階段を駆け上がる。絶対不自然だ。わかっている。顔
が赤くなる。

レイさんはしなやかに後ろから追いかけてきて、

僕が部屋のカギをかけるまえに、僕の部屋に滑り込んだ。

「レイちゃん・・・」

「お前、なんかあつただろ」

あつた、ベリーハヤシなー。でも僕はなーと、聞こえるわけがない。

「あ、僕、やあひの風呂はこいつをここですか?ちよつと疲れちゃつて」

「・・・ああ、わかつた」

レイちゃんは自分の部屋へ戻つていった。

僕は着替えとタオルをつかんで、一階の風呂場へ走った。

ママンたちが風呂を沸かしておこしてくれたらしい。

風呂場にまちむかひと湯気が立ち込めている。

シャワーを浴び、身体を洗つて湯船につかる。

やつやの出来事がひとつも頭から離れない。

ただの冗談？ そのはずなのに、なんでこんなに苦しこんだろ？

サトシさんの低いかすれた声と優しい笑顔、あたたかな顔を思い出す。

風呂から出たが、わつ一慶、サトシさんのところへ行こうかな。

そして、じつはあなたじとをしたのか、ひやんと教えてもらおう。

・・・でもそれが言い訳だつて、自分でもわかっている。

僕はただ、もつとサトシさんのやせで・・・

そこまで考えたとき、風呂場のドアがノックされる。

「モト…まだ入つてんのか？」

そつこえぞ、ふだんに比べてずいぶん長く湯船に浸かっていたような気がする。

「はー、すみません、わつ出ます」

「いや、やつべつして。俺はシャワーだけでいいから。入るぞ」

ドアが開いて、レイさんが入ってくる。

真っ白な湯気のむじりで、レイさんの影だけがぼんやり見える。

僕はやっぱりなんだか照れくさくなつて、風呂場を飛び出で、部屋へ戻つた。

部屋へ戻つて、カギをかける。

もつ、今日は考えても無駄な気がする。もつ早く寝て、夢だつたと思つて、忘れよ。

僕は布団を敷き、部屋の電気を消して電気スタンドだけをつけて、大学の教科書を開いた。

・・・だめだ。ぜんぜん頭に入らない。

ドアがまた、ノックされる。

「モト。忘れものだ」

なんだか。ドアを開ける。レイさんがふと笑う。

「お前、俺になんか言こられたることあるんだ？」

いや。言こられとかじやなくて、言えないんです。でもやつも言へない。

「入つていいか？」

「どうせ眠れそうもない。僕はどうせ、とこつてレイさんを招き入れた。

薄暗い部屋の中、レイさんはこつもの冷やかなまなざしで僕を見る。

「……サトシが、帰りになんか言つてたな」

「あれは……その……」

レイさんはいつだって、僕の心を見透かしてしまつ。

僕は本当にだらしない。いつもみんなに振り回されっぱかりだ。

あの春の件でも、夏のあの日も。

男のくせにだらしなことは思つぱり、僕はまたボロボロと涙を零してしまつた。

「サトシさんが・・・」

「何?」

僕はレイさんの綺麗な顔を見つめる。黒く長い睫毛にふけだられた、美しい瞳。

その瞳が一瞬、揺らぐ。

▽改ページ▽

「言つてみる

「その・・・ケーキを・・・」

とても綺麗なケーキを2人で食べたこと。そのクリームが口の周り

についたこと。

それを・・・サトシさんが舌で舐めたこと。

僕の顔は恥ずかしさで真っ赤になつていたことだらう。

「・・・それで？」

レイさんの形の良い眉がひそめられる。綺麗な瞳が怒りの色をおびていく。

「それから・・・サトシさんが僕に・・・キス・・・を」

僕は続ける。それは冗談であるようなものじゃなくて、深く長いキスだったこと。

そのあと、もつとほかのことも、されたこと。

僕は涙が止まらない。

レイさんは静かに立ち上がり、電気スタンドを消した。

部屋の中は真っ暗になる。わずかに差し込む月明かりだけがレイさ

んの影を温めし出す。

レイさんは僕の正面に座り、その指で僕の涙を拭いとる。

「何をされたって？」

冷たい声が僕の耳元に響く。

「キスを…されました…それから…舌を…」

レイさんは細い指で僕の唇に触れ、唇の周りをゆっくとなでる。

「舌を、どうされたって？」

「…レイさん…」

「答えよ」

その言葉があまりに強い調子だったので、僕は肩を震わせる。

「舌を、口の中へ、入れられて、それから・・・」

レイさんは僕の言葉を遮るよつこ、その薄い唇を僕の唇に重ねた。

「んつ・・・・・」

僕は思わずレイさんを突き飛ばす。

「や、やめてください」

レイさんは逆に僕を布団の上に押しつけた。細い腕のどこにこんな力があるんだろう。

「なんで、ひとつでありますの店、行つたんだ」

「だって、今日レイさん仕事だし、僕、ヒマだったから・・・」

レイさんは僕を押しつけたまま、無理やり唇のなかへ舌を押し込んでくる。

「んつ・・・・・」

そのまま僕の性器に指を這わせる。

「なあ、サトシ君なことわれたって…もつと聞かせよう

レイさんの瞳に、被虐的な光が宿る。

そのキスはあまりに乱暴で、僕の唇に血がにじむ。

「レイさん…・・・痛いよ・・・

胸に、つまつまと歯をたてる。肌に思い切り吸いつく。
痛い、痛いと声をあげる僕を面白がるよつて、レイさんは僕の首に、
鎖骨に、

僕は思わず叫ぶ。

「 むひやめてください…サトシさんよ、そんなことしなかった…

「

「そんなんにサトシがいいか？」

美しい瞳が、僕の間近でせつなげに歪む。

「いいとか……ちひりじゅなこよ、レイさん、おかしこよ」

レイさんは僕を抱き起こして、今度はとても優しく、触れるよつてキスをした。

さらさらと流れる茶色の髪。それがこんなに柔らかなものだと、僕は初めて知った。

「モト。お前はわかつてない」

そつと僕を抱きしめて囁く。

「一緒にハウスで暮りあよづになつてから、俺がどれだけ……」

腕に力が入る。僕はレイさんの腕の中であくよづて囁く。

「レイさん……苦じこよ……痛こよ……」

「なのに、お前はサトシなんかと」

「違ひよ、あれはサトシさんが・・・」

また僕は布団の上に乱暴に突き飛ばされた。

レイさんが、スウェットと下着を脱いだ。

すぐ「僕の上にのしかかり、僕も着ているものを脱がれて全裸にされる。

レイさんのスリムな身体全体に筋肉が浮き出で見える。僕は自分の貧相な身体が悲しくなる。

「なあ、サトシがどうやって舐められたのか?」

「レイ・・・さん・・・」

「ううせへー」いつやつて舐められたのか?」

レイさんは僕を押さえつけて乳首に舌を這わせる。何度も、執拗に。

「アーティストのアーティスト」

レイさんはまた、僕の身体に歯をたてる。胸から、腹、そして、ペニス。

「痛いよ・・・レイさん・・・んつ・・・」

こんな状況なのに、僕のペニスはこれ以上ないほど大きくなつてい
た。

レイさんの事が、呪が、ぴりやぴりやと音をたてて責め立てる。
わしこれ以上続けられたら僕は・・・

「レイさん、お願いだよ、もう・・・もう許してよ・・・」

レイさんは身体を起こして、僕の髪を強くつかみ、冷たく言い放つ。

「許さない。サトシにやられるのが嫌だつたらどうして逃げなかつ

た？」「

「それは・・・」

「本当はやられたかったんじゃないのか。サーシのことが好きなんじゃないのか

「違うよ、そんなんじゃないよ・・・」

レイさんは僕の元、その綺麗な顔を近づけて囁く。

「モト。お前、俺が好きか？」

息が止まる。・・・わからない。でもその美しい顔も、長い足も、格好いいことよりも、

いつも僕を守ってくれる優しいところも、たしかに僕は大好きだ。

だからそのまま、レイさんに云えた。

レイさんは僕の手を優しくとつて、自分の顔に触れる。そして首、肩、胸、足へと、

順番に自分の身体に触れさせていく。

「なあ、モト。俺の顔も、身体も、まる」とお前のものだ。何があつても守つてやる

僕はなぜだか涙があふれなくて、またボロボロ泣いた。

「だから、もうひとりでサトシに会いに行くな。わかったか？」

僕は泣きながら何度もうなずいた。

「絶対だぞ。俺以外に今度抱かれたら、絶対に許さないからな」

レイさんの唇がそつと僕の涙をすべくこと。

「レイさん・・・

僕はつれしくて泣いていたのだと気づいた。

レイさんこそ、こんなにも大切にされて、僕はもう何も怖がらなくて
もいいんだと。

あのクリスマスソングも、いまなら聴いても大丈夫かもしれない。
そんなことを考えた。

僕は自分からレイさんの首に腕を絡ませて、布団の上に誘った。

レイさんはクスクスと笑いながら、僕の身体中にキスをして、
そつと僕のペニスに触れる。

「モト……いいか？」

レイさんが望んでいることはわかつていて、僕はレイさんの脣にそ
つとキスをした。

そして、布団の上にうつぶせになる。

レイさんの熱く柔らかな舌が、僕の敏感な部分を押し広げていく。

細い指が絶え間なくペニスを刺激する。

「んつ……あ……ん……」

恥ずかしい声が漏れる。レイさんが耳元で囁く。

「どうしてほしい? なにがほしい?」

「ああ、もうわかつてこないせに、意地悪だ。僕はかすれる声で叫ぶ。

「お願い……レイさんのを……僕に……ようだい……」

指の動きは激しさを増す。

「うあっ……ダメ……僕もう……」

そのとき、僕の中にレイさんが入ってきた。熱く激しく、僕の中で暴れてくる。

「モト……もう、俺だけのものになれよ……」

一番奥まで入れた状態で、レイさんが動きを止めて僕を後ろから抱きしめる。

「んっ・・・・・レイセ・・・・・ん・・・・・わかつたよ・・・・・うれしこ・・・・・

」

レイさんが僕の名前を呼びながら突きあげる。

僕はだらしない声をあげながら、それを受け止める。

幸福感と快感の波にのまれて、僕たちは同時に累てた。

もう、離れない。僕はレイさんの、もの。

**

ジリリリリリン、とこつものすゞい音で目が覚めた。

頭が痛い。目の前にサトシさんとレイさんがいる。耳元で巨大な目
覚まし時計が鳴っている。

「つはははは、オマエ、なに毎間つから寝てんだよー?」

ああ、そうだ。昨日バイト先の飲み会で遅くまで飲んで……

じゃあ、あれは、夢……？

サトシさんは勝手に僕の部屋のちこさな机をひっぱつだして、

その上に飲み物とケーキを並べはじめた。

「じゃ普通の、ショートケーキ。

「今日はクリスマスイブなのに、ビール予定もないだらうから来てやつたんだよ」

サトシさんが笑う。

レイさんは呆れた顔で、お前がヒマなだけだらうが、とつぶやく。

当たり前の、いつものふたり。

僕はなんといつ夢をみていたんだらう。思わず笑いがこみ上げる。

そのあと、安いシャンパンで乾杯し、ケーキを食べながらべだらな
い話をした。

「あ、そうだ。知り合いのケーキ屋が、明日ケーキが余ったらくれ
るって言つてた」

サトシさんが思つ出したよつて言つ。

「モト、甘いもん好きだったよな？明日ヒマなじむに来てこよ。可
がつてやるからよつ」

妖しげなまなざしを送つてくる。背筋が寒くなる。

レイさんが僕の肩を抱いて、

「ふざけんな。こいつは俺のモノなんだよ。なあ、モト

とぬが触れそつた距離まで顔を近づかる。

一瞬の間。

ふたりがお腹を抱えてギャハギャハと笑いだした。

やられた。またからかわれた。

こんな毎日を過いでいくのも、まあ悪くないか。

僕はふてくされた顔で、ふたりのケーキにのつっていたイチゴをひょいひょいと食べてやった。

(おわ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107z/>

クリスマスローズの罠

2011年11月30日19時47分発行